

友達

高松中央高等学校 山口眞緒

車の通り自体は少なくせに、笑えるスピードの車しか通らないT字路。白線なんて、ほとんど意味をなしていない街。私の家の、すぐ近く。そこには地域猫がいる。黒いのと白いのと茶色いのが他にもいるが、今回話すのは灰色のにしよう。

グレ子。私の母親が勝手にそう呼んでいる。灰色の縞猫。グレーだから、グレ子。安直すぎると思いつつも、母親が家では私の名前に子をつけて呼ぶのと同じように愛着があったのだと思う。

グレ子は私の数少ない友達だ。私が勝手にそう言っている。初めこそ近づくと逃げられたり、近づけたとしても引っ掻かれたりしたが、最終的には私の家の玄関まで着いてくる程度には仲良くなれた。正直、家には入れられないからかなり困った。

私がグレ子を友達と呼ぶ理由はもちろんある。大した理由ではない。ただ私が一方的になんでも話せると思っているからだ。道路の隅っこで猫に話しかけていた私を想像すると少し、いやかなり気味が悪い。しかしこの際そんなことはどうで良い。だって私はグレ子に救われたのだから。

きっかけは、泣きながら帰路についていた私にグレ子が近づいてきたことだった。嫌なことがあった私は、半ばヤケクソでグレ子のことをわしゃわしゃと撫でた。するとグレ子は目を細め、私にお腹を見せた。あまりの呑気さに、私は笑うしかなかった。

これが、猫が友達だという悲しき人間の誕生だ。

猫が友達だという悲しき人間が失敗してすぐに立ち直れるはずはなく、むしろ毎日些細なことでクヨクヨしてしまう。私はいつもすぐに世界に打ち負けてしまう。だから私はほぼ毎日グレ子と戯れるという日々を送っていた。

授業での失敗、友達からのからかい、家族との喧嘩、自分への嫌気。それらの全てがグレ子の可愛さでどうでも良くなったのだ。私のことを傷つける大嫌いな世界なんてどうでも良くなる。目を背けられる。

一匹の猫に自分の世界を征服されるなんて、馬鹿みたいな話だ。今の私もそう思う。

木々の葉が枯れ始めた頃だっただろうか。グレ子を見かけなくなった。簡単な話だ。あいつは死んでしまったのだ。私の家のすぐ近くの、ありえないスピードの車しか通らない、危ないT字路で横たわっていたらしい。私は見ていない。

猫が友達だという悲しき人間が、一匹の猫に世界を征服されていた人間が、このことを受けて立ち直れるはずがないと思うだろう。私もそう思う。実際、数日間には悲しくて仕方がなかった。でもその数週間だけで、今となっては案外ケロッとしている。

よくよく考えてみれば、私が些細なことでクヨクヨする悲しき人間なのは、グレ子が居てもいなくても変わらないのだ。グレ子が居たから吐き出せていただけで、元々はただの悲しくて暗い人間なのだ。何も変わらない。

そう気づかせてくれたのは世界だった。厳密に言うと、時間だが。

グレ子が死んでしまってから数ヶ月、私が授業の失敗で、友達からのからかいで、家族と

の喧嘩でクヨクヨするのは何も変わらない。そんな自分に嫌気がさしているのもいつも通りだ。ほら、私は何も変わっていない。

いつも世界は、私に現実を見せる。いつも世界は、私を打ち負かさせる。そんなことは当たり前になっているだろうと、世界とはそういうものだろうと思うかもしれないが、これを書いているのは猫が友達だという悲しき人間であることを忘れないで欲しい。でも世界がそうしてくれたおかげで、私がいつまでも一匹の猫に囚われ続けている最悪な人間にはならず済んだ。

図らずとも私は世界に救われる。もしかしてお前は、グレ子なのか？